

都立葛西海浜公園西なぎさにおける干潟の生物市民調査の取り組みと手法の変化
Public participation for research of benthic invertebrate animals in Nishi-Nagisa,
Tokyo Kasai Kaihin Park and change the methods

○大原 庄史 (NPO法人生態教育センター)・馬渡 和華 (習志野市谷津干潟自然観察センター)
Masashi OHARA (Center for Ecological Education)・Kazuka MOTAI (Yatsu-Higata
Nature Observation Center)
ohara@eco-plan.jp

Suzuki and Sasaki (2010) が考案した「干潟生物市民調査法」は、調査データの収集だけでなく、参加した市民が干潟環境や底生生物に興味を持つことが期待され、各地で行われている。東京都江戸川区にある都立葛西海浜公園の西なぎさは、2014年よりこの手法を用いて一般市民向けにイベントを継続的に開催している。これまでに得られた結果や、手法の変化について報告する。

調査地は、西なぎさの東側と中央の2箇所とした。東側は泥質地帯であり、中央部は砂泥質地帯である。イベントは、一般公募で集められた市民と2014年から2018年にかけて、年2回実施した。開催月は、2014年は4月と9月、2015年は5月と9月、2016年は4月と9月、2017年は5月と9月、2018年は4月と10月である。30~40分の間、目視またはスコップを使って底を掘り返して底生生物を集めた。採集した底生生物は採集の後に、参加者ととも同定を行った。

これまでに確認されたのは82種であった。実施回別では、2014年4月25種、2014年9月21種、2015年5月32種、2015年9月30種、2016年9月19種、2017年28種、2018年4月30種、2018年10月21種であった。分類別では、軟甲類が25種と最も多く、次いで二枚貝類が20種となり、目につきやすい甲殻類や貝類など大型の種が多かった。また底生生物だけでなく、硬骨魚類も9種確認された。環境省レッドリストに記載されている種もあり、多くの目があることで確認種数の増加が認められた。調査に参加する市民は多くが小学校低学年の親子連れであり、「干潟生物市民調査法」では採集作業や同定作業に課題があったため、作業を単純化することでより関心を持って調査に参加してもらうことができた。また、観察会を通して、参加者が干潟の生きものに関心を持ち、サポートスタッフとして参加するようになった。

葛西海浜公園西なぎさでの取り組みは、市民調査の入門編として位置づけることにより、経験値を上げる機会とし、干潟の調査員の育成に目指していきたい。

本大会では、これらの調査結果のほか、葛西海浜公園西なぎさにおける干潟生物市民調査の進め方や、普及啓発の効果について報告する。

キーワード：干潟生物市民調査法、葛西海浜公園、環境教育、干潟、底生生物

引用文献：Suzuki, T. and Sasaki, M. 2010. Civil procedure for researching benthic invertebrate animals inhabiting tidal flats in eastern Japan. *Plankton Benthos Res*5(Supplement) : 221-230.